



社会福祉法人 聖隷福祉事業団  
総合病院 聖隷三方原病院  
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558  
静岡県浜松市北区三方原町3453  
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功  
編集者 横地健治

2019年5月1日

知的発達を促すには

横地 健治

今回は、重症心身障害幼児の知的発達を促すにはどうしたらよいかを考えてみます。幼児期後半になった健常児では、学習はたいいてい言語を介して行われます。知識を増やすことは言語活動そのものです。論理的に思考することも言語が密接に介在しています。計算もそう言えます。そうすると、言語未獲得の1歳未満の健常児では、どんなふうになるか。どころか、何が増えているのか、何がなければ知的発達に損なわれるのかといったことはよくわかっていません。母親は特に意識せずふうに育てていけば、その子の知的機能はふつうに伸びていきます。そのため、この解明は学問的な価値はあっても、健常児の育児には実際上の価値はあまりありません。しかし、有意な言語理解のない重症心身障害児では、この知的発達機序の解明は有益です。なぜなら、言語理解が明らかになる以前にも、水面下で知的発達は着々と進展しているかもしれないからです。そうなら、的を射

た後押しは遅い発達を進ませることができそうです。そこで、健常児がどんなふうになるか、そして、もしそれを後押しするならばどんなことをすればいいのかわからず考えてみます。まず、聞こえてくるものの理解の道筋についてです。これは、ヒトでは胎児期から始まるとされています(例えば、新生児は母の声がわかる)。その発声者たちを区別しているはずで、このうち、リズムは重要だと思います。ヒトの発するひとくくりの声のリズムが、聞こえてくる全体から音声言語として抜き出されているからです。さらに、それが何と対応しているかと解釈する試行錯誤を繰り返して、言語(母国語)を獲得していきます。それでは、それを成す原動力は何でしょうか。まずは、聞こえてくるものが、自分にとって保護的なのか攻撃的なのかを知らねば生きていけないという生き物として本能的探求心が基礎にあると思います。さらに、自分と同種

の存在(ヒト)の心はより深く知りたいという根源的欲求が加わり、ヒトの発する音や声には探究心が増すのではないのでしょうか。なお、聞くという行為は、身の回りで発する膨大な音や声から自分に関係するものを抜き出す能動的な行為なので、エネルギーが要ります。しかし、自分と関係する人の発する音や声は、その人を知りたいという根源的欲求により、少ないエネルギーで聞き取れるはずで、よって、その子がその時注目している人が、その子が自分に関係するものと思っているものを操作し、そこで発した音を聞かせ、そこで起こったことを声で伝えたなら、これらはその子には聞き取りやすいはずで、この経験は、その子の聴覚的知的機能を発達を促すことになるだろうと思えます。その時間かせる声はその意味を理解されなくても構いません。それは聴覚学習の材料だからです。

次に、見てわかることはどんなふうになるか。ヒトでは、外界からの情報の多くを視覚から得ています。まずは、目に入った全体から、ものを分離する作業が行われます(例えば、テーブルに置いたものの中にリングがあっても、初めはリングをものとして抜き出せない)。そして、ものの形・色、ヒトとの関係の理解が深まり、それに対する社会の共通認識を受け入れ、ものに名前を付けていきます(テーブルの赤い丸い食べ物を「リング」と名付ける)。これに至るには、膨大な試行錯誤が行なわれたはずで、(なお、「リング」の語を習得した後も、「リング」と言うか言わないかの境界付け作業は継続されます)。これに対し、まだものに名前を付けられない段階での理解程度は様々です。そのものを分離もできていないか(そうなら、そのものは存在してないことになる)、そのものの特性は社会の共通認識とほぼ同等となっているが、名前が付けられないという段階まであります。ものの特性の理解には、その形とヒトとの関係が重要です。前者は、花には葉と茎がある、テーブルは4脚であるといったことです。後者は、食べ物になるか、危険物か、何に使う道具かといったことです。視覚的知的機能を伸ばすには、その子のものの特性の理解度を察することが前提になります。その一歩先の理解を促すものを見せるべきです(例えば、リ